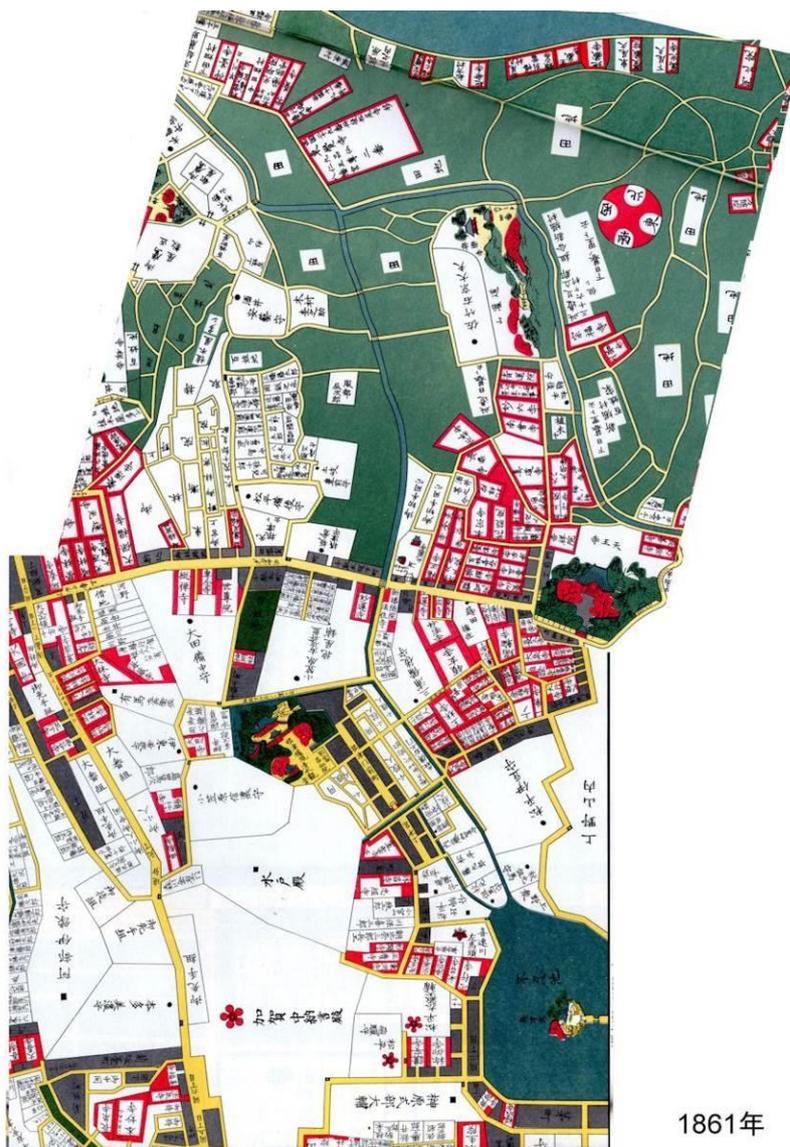


「地図豆」の地図を広げて街歩き

10-1 谷田川（藍染川）をどこまでも歩く（距離約9.5km）

【街歩きの概要】

不忍池から谷田川（藍染川）の跡に残された小さな通りや商店街をどこまでも歩く。最後は、分水界となるごく小さな峠を越えて、北流する無名川をくだり、谷田川、別名藍染川のかつての源流、石神井川へと向かう。



江戸切絵図

江戸切絵図（人文社）に見る谷田川（藍染川）は、右下の不忍池へと流れ込んでいるが、明治・大正期の地図では、不忍池に入らずに西辺を経て、南辺を東へと流下している。

地図豆知識：江戸切絵図というもの

江戸切絵図とは、江戸時代末期（1850年以降）に携帯用に作成された切図（分割した地図）で、大きさは48センチ×46センチほど。約30枚の切図で当時の江戸が網羅されている。

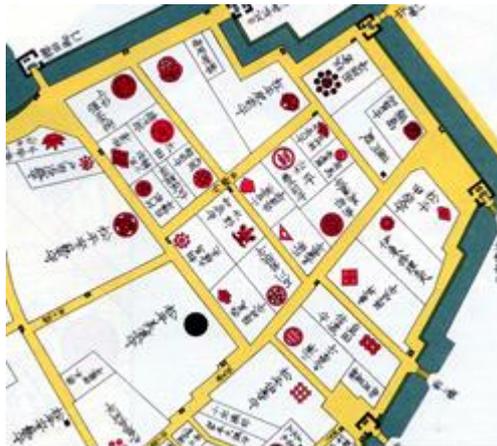
版元によって、吉文字屋板、平野屋板、近吾堂板、尾張屋板があって、いずれも使いやすさを最優先した結果、一定地域を一枚の範囲に収めるためのデフォルメもあり、縮尺はおおむね一万二千分の一だが、詳細は図中でも一定ではない（市販の複製地図帳なら、紙の大きさに納める工夫もしている）。中でも色鮮やかに彩色されたものは、大江戸ガイドマップといった風である。

切絵図には、いくらかの決まりといったものがある。武家屋敷や寺社では、書かれた名称の頭方向が屋敷の表門入口、坂の名称も頭方向が坂のてっぺんを示している。版元にもよるが、川の名前も上流から下流に向かって書かれ、大名の上屋敷には家紋が、中屋敷には■の記号、下屋敷には●の記号が付されているものもある。

さらに、町名は江戸城方向を頭にして書かれているなど、徹底的にユーザを意識した作りになっている。

そうしたことから、江戸切絵図は江戸歩きの者に好評を博し、実用品として用いられただけでなく、浮世絵などと並んで江戸土産としても重宝されたという。

残された江戸切絵図からは、江戸期から明治にかけての東京の姿を見ることができ、現代の江戸ウォーカーにとっても必需品である。



谷田川辺りの「江戸切絵図」（人文社）

地図豆知識：川跡探しの極意

過去の風景を現地ですでにたどるには、河川跡歩きに限らず事前の準備が必須である。そのためには資料収集が必要になり、現在の地形図のほかに、開発が今ほど進んでいない過去の地形図、同空中写真などを用意する必要がある。

関東地方を例にして、参考になるものを新しい順に列記すると以下ようになる。

- ・「デジタル標高地形図」(国土地理院)
- ・都市部では、1/10,000 地形図、その他は 1/25,000 地形図(国土地理院)
- ・明治期以降に刊行された「旧版地形図」(国土地理院)
- ・1945 年以降に撮影された米軍写真を含めた空中写真(国土地理院)
- ・第一軍管区地域の測量図「二万分一迅速測図(1880~1886)」(国土地理院)
- ・「五千分一東京図(1884)」(国土地理院)
- ・明治期以降に刊行された「民間地図」
- ・「江戸切絵図」(人文社などの復刻版)

- ・「川の地図辞典」(菅原健二著 之潮)
- ・「江戸名所図会」(斎藤幸雄著 角川書店)
- ・「遊歴雑記初編」(十方庵敬順著 東洋文庫) その他興味内容に応じて。

概略のルートは参考書「川の地図辞典」で、更にはデジタル標高データ(地形図)で明らかになる。さらに詳細に知るには、単色の旧地形図上で河川を読み彩色する。あるいは、現地形図の等高線をたどって谷を見つける。そして、必要に応じてお絵かきソフトなどを新旧のデータを重ね合わせると、その詳細が明らかになるだろう。

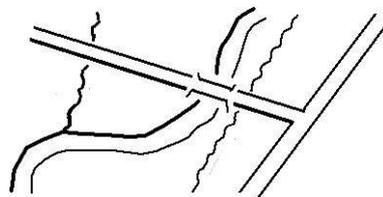
いずれの場面でもデジタルデータを利用することで作業は楽になるが、紙地図を使用した方が等高線の知識が格段に向上するだろう。

さて、下準備をしてから街歩きに出かけるのだが、そのためには、現在の地図上のこの辺りが河跡だろうという予測を立てる必要がある。そのためには地図を読む力が必要になる。現地においても、おなじような読みが必要になる。川跡はしばしば新旧の行政の界になるし、緑道、空き地、曲線を描く細道となることもある。もちろんのこと、川縁の石積み、川へ下りる石段、欄干・橋柱などが小さく残ることもあり、川跡の道には建物が背を向けるだろうから、こうした知識の下で、いい意味での予断をもって探し歩く必要もある。



旧版地形図での河川の表現 1

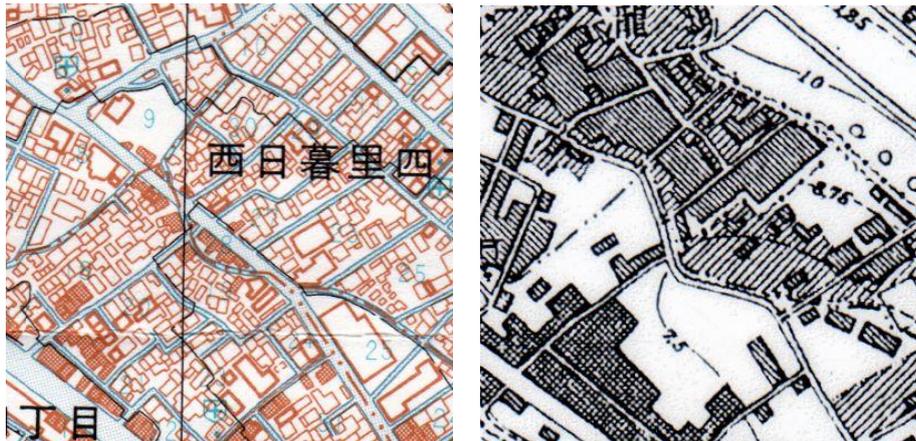
旧版地形図での1条線であらわす河川は「解糸状」に表現されている。そして、自然河川は、必ず等高線の下流から見て凸部になった最尖端を通過する。(1/10,000 地形図 「王子」 M42 測量 T5 修正)



旧版地形図での河川の表現 2

影の付き具合に注目するとわかるが、旧版地形図での2条線であらわす河川（下中央）は北西に光源があるとして凹みがあるものに対する影を付けて表現される。その区分にもよるが、道路（上中央）は凸があるとして表現される。

1条線であらわす河川は、もちろん「解糸状」になっている。(1/25,000 地形図「東京首部」 T5 測量)



行政の界や道路の不自然な形から河川跡が予想できる

現在の地形図（左）にある行政の界や道路の不自然な形から、河川跡が予想できるだろう。じっさい、旧版地形図（右）を参照すると現行政界の一部は、後述する墨引きの跡、あるいは（小さな橋の表現などから）河川跡とこれに沿った道路跡であることが明らかになる。（1/10,000 地形図「池袋」H5 修正と「王子」T5 修正）

【道順】

上野駅→（藍染川）→不忍池→鷗外荘→谷田川跡の始まり→せんべい大黒屋と謎の三角形地帯→臨江寺→三浦坂のねんねこや→丁子屋→へび道→よみせ通り→谷中銀座→アザレア通から駒込へ→駒込銀座から→無名川？の蛇行道→音無親水公園・王子神社・JR王子駅

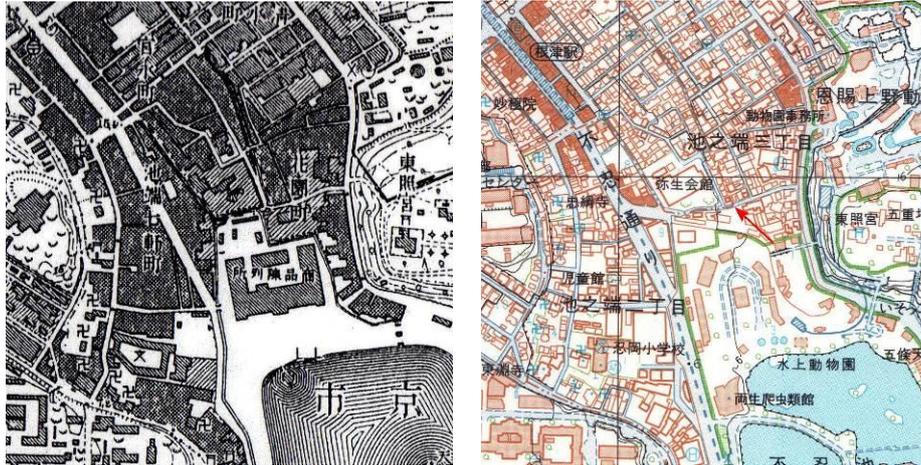
【街歩き解説】

①上野駅から

谷田川、別名藍染川の源流たどりの歩きを、河川跡周辺に広がる商店街などにも寄り道することにして、最下流にあたる不忍池からスタートする。

②藍染川

北区西ヶ原付近から流れ出し、蛇行しながら駒込道坂、道灌山を東に流れて、南下し谷中初音町から台東区と文京区の区境となり、谷中三崎町、真島町、清水町、上野花園町（現池之端3丁目）の西端を南流し不忍池に注ぐのが藍染川である。明治・大正期の地図では、不忍池に入らずに西辺を経て、南辺を東進し、忍川に注いでいる。



谷田川跡の始まり

明治・大正期の地図では、上流から流下した二つ分れた流れが商品陳列場とある辺りで合流し、不忍池の西縁を経て、同池の南縁を東へと流下している。谷田川跡の小路は赤矢印から始まる。(1/10,000 地形図 「上野」 T5 修正)

そして、この地には染物や洗張を生業にする商店が集まっていたため、藍染川と呼ばれていたのだが、別名シジミ川、螢川とも呼ばれていた。川幅約3メートルの細流で、清らかな川でシジミがとれ、螢の名所もあったのだ。

もっと昔には、石神井川がこの流れをたどって、不忍池、湯島へて東京湾に注いでいたことがデジタル標高地形図を参照すれば、だれの目にも明らかになる。石神井川が、飛鳥山の北から東進して荒川に流れるようになってから、北区西ヶ原付近を源流とするようになり、その後すべての流路が暗渠になった。

ということで、この辺りの藍染川のかつての流れは、不忍池の西から池の南にある野外ステージ、そして下町風俗資料館を結ぶように流れていた。ここに残る甘味の「みはし」の名や旧三橋町の名は、蓮見橋、花見橋、中橋と三つの橋が架かっていたことにちなむとか。1884年には、共同競馬会社による競馬場の建設に伴い、川は埋め立てられた。池を周回する競馬が行われたのだ。

③不忍池

縄文時代、この辺りは東京湾の入り江であったものが、海岸線が後退したときに取り残されて、池になったと考えられている。そして、寛永寺が建立されたときに、不忍池を琵琶湖に見立て、竹生島になぞらえた弁天堂(中之島)と弁天堂を作ったという。弁天堂は、寛永寺を創建した天海僧正が建立。周囲2kmほどある。その北方には聖天島という小さな島がある。

天海僧正が吉野から移植したという、桜が湖畔を囲むようにある。春には桜、夏には蓮が美しい。いま不忍池西辺には、小さな人工的な流れがあって、かつて谷田川がここにあったことを想像させる。

東京招魂社（明治12年から靖国神社）の境内には、馬場が作られて明治3年（1870）から明治31年（1899）まで、春秋の例大祭に奉納競馬が行われた。これが、日本人による国内初の洋式競馬である。上野にも不忍池をめぐる競馬場があって、これはおなじ明治12年に設立された共同競馬会社による戸山学校競馬場が、明治17年に上野へ移転して来たものである。その後明治25年には解散した。

④ 鷗外荘と谷田川跡の始まり

不忍池西縁を通過した川筋を確認して東へ折れたのちは、すぐには北上する谷田川跡の路地に入らずに、さらに東へと進むと森鷗外の旧居跡（ホテル内にあつて、だれでもが見学ができる）がある。そこには森鷗外が暮らした日本間があつて、この地でドイツ留学の思い出を書き綴った名作「舞姫」が執筆されたということで、「舞姫の間」と名づけられている。

そして、不忍池の北から川跡の道が残る。狭いところでは幅1.30mほどの小さな路地だ。明治期地図で確認すると明らかだが、このあたりの谷田川は2本に分岐して、残る一つは不忍通りの1本東にある通りが川筋である。そして天眼寺あたりで合流していた。台東区・文京区の界がそれを表現している。いずれも大正10年から暗渠化が始まり、今ではその上に道路があるだけでなく上流部では商店街が続いている。

⑤ せんべい大黒屋と謎の三角形地帯

特徴的な狭い路地を抜け言問通りに出ると、通りの向こうにせんべいの大黒屋がある。辺りには菊見煎餅、谷中煎餅もある。江戸庶民の行楽地を控えて、せんべいや団子を商う店が多かったことの名残だそう。

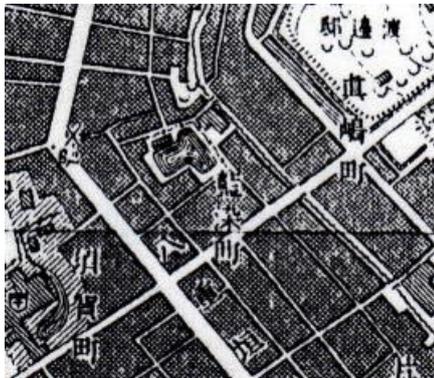
また、現在の大黒屋のある場所は不思議な三角形地帯でもある。江戸期切絵図を見ると当時の三角形の南半分を切り落とした形が今も残っていることになる。



謎の三角形地帯の江戸期切絵図（左）と現在の地形図

⑥臨江寺

その後の谷田川跡はやや広く直線的になって北上している。川筋にあたる道に沿って臨江寺があって、林子平・高山彦九郎とともに、寛政の三奇人といわれた儒学者蒲生君平（1768-1813）、「あらくれ」「縮図」などの作品で知られる小説家徳田秋声（1871-1943）の墓がある。



藍染町とあかぢ坂

池も見える藍染町あたりの藍染川（左）と谷田川（藍染川）跡から、あかぢ坂を見る

その谷田川跡東の三浦坂の北側には、何やら異様な雰囲気がある「ねんねこや」がある。その先には、大名時計博物館もあって見どころは尽きない。谷田川筋に戻ると、別名藍染川の証人ともいえる染物、手ぬぐいの丁子屋がある。創業は明治28年だという同店には、木造建物の外観にも店内にも趣がある。

⑦へび道

地形図の等高線を読みとれる者はもちろん、そうでない者なら等高線を色塗りして抽出すれば、現地に向かわなくても辺りが谷底であることは明らかになる。じっさい、この辺

りで周囲を見渡すと、東側には三浦坂やあかぢ坂、西には異人坂や根津神社への坂道があって、東西に高まりを持つことが誰の目にもわかるだろう。もちろん、デジタル標高地形図を見れば一目瞭然だ。

あかぢ坂の西に延びるのが藍染通りである。これと交差する藍染川（谷田川）の由来は、川筋に染物屋があり、川の色が藍色に染まっていたからだといわれ、この辺りにかかる橋を合染橋（別名枇杷橋）などと呼んだという。藍染通りの道幅はやや広く、家々の緑が多いのが特徴だ。その通り越えた先が、文字どおり蛇行した道が続くへび道となる。そこは文京区と台東区の境目になっていて、下町らしい雰囲気がある。



へび道とリボン会社

へび道南入り口の道路標識と、かつてあったリボン工場

⑧よみせ通り

蛇行したへび道が終わった交差点の東側は、三崎坂である。三崎坂には、銭湯の朝日湯や千代紙のいせ辰、下駄を売る履物屋などの下町風情の感じられる店などが並んでいる。さらに北進すると、「よみせ通り」商店街となる。谷田川跡は、この「よみせ通り」とほぼ一致していた（文京区と台東区の境）。その川岸にあたる場所に、ゆび人形の実演もする「笑吉」があるからのぞいてみるのもいい。

「よみせ通り」には、今では珍しい三角屋根の製版工場がある（つい最近まであった）。昔この辺りには、川沿いにリボン工場があって、川の色が黄色に染まったり赤に染まったりすることで、そのときに作っているリボンの色がわかったとか。現製版工場は、その名残の工場らしい。

⑨谷中銀座

「よみせ通り（商店街）」の谷田川跡は、谷中銀座を横切ったのちもそのまま北上するのだが、谷中銀座を東へと進んで川跡から少し離れてみる。谷中銀座をすこし東へ進み西日暮里3・4丁目あたりには、なだらかな曲線を描いた幅が1.3mほどしかない小道が北上している。台東区と荒川区の界である。

この辺りには、いわゆる「墨引き」といわれる（朱引きよりさらに狭い範囲の）江戸町奉行の管轄する御府内町方区域があって、そこが現在の行政の界になっている。ここをたどってみる。

「墨引き」跡の道は、なだらかに西にカーブしながら進み、道灌山通りの先で、谷田川跡であるよみせ通りに続く谷田川通りを斜めに横切るものの、すぐ東側へもどる場所がある。そこは、「行政の界や道路の不自然な形から河川跡が予想できる」の地図にあるとおりで、谷田川の小さな蛇行跡が路地や空き地になって残っていて、興味深い。



狭い空き地になった谷田川跡

⑩アザレア通から駒込へ

西にむじな坂を見て、谷田川通りからアザレア通に入る。谷田川跡は、この谷田川通りの田端銀座前交差点手前から、アザレア通に入ると思われる。そして、駒込駅の東で山手線をくぐるのだが、川の面影は少ない。

⑪駒込銀座から

こののち駒込銀座、霜降銀座、チェルナード染井銀、西が原銀座、ふれあい通りと延々と続く商店街をたどれば、谷田川跡をたどることになる。その名も霜降橋の交差点から、霜降銀座へ入り、チェルナード染井商店街との間に分水界がある。といっても、地図との対象だけのことで、現地風景だけでは容易に高まりを見つけられないだろう。ここから先は、石神井川へと北進する逆川（無名川）の跡になる。

ただし、谷田川のもう一つの源流は現染井霊園西にあった長池にあって、そこから慈眼寺、勝林寺あたりを経て霜降銀座へと下っていた。



谷田川と逆川（無名川）との分水界付近のデジタル標高地形図

（「TokyoTerrain on the Google Earth」）

「・16」に近い等高線のくびれたところが、両川の分水界である。今の飛鳥山の北で東へと流下する以前の石神井川は、「・16」からそのまま不忍池へと南流していた。

⑫ 逆川（無名川）の蛇行

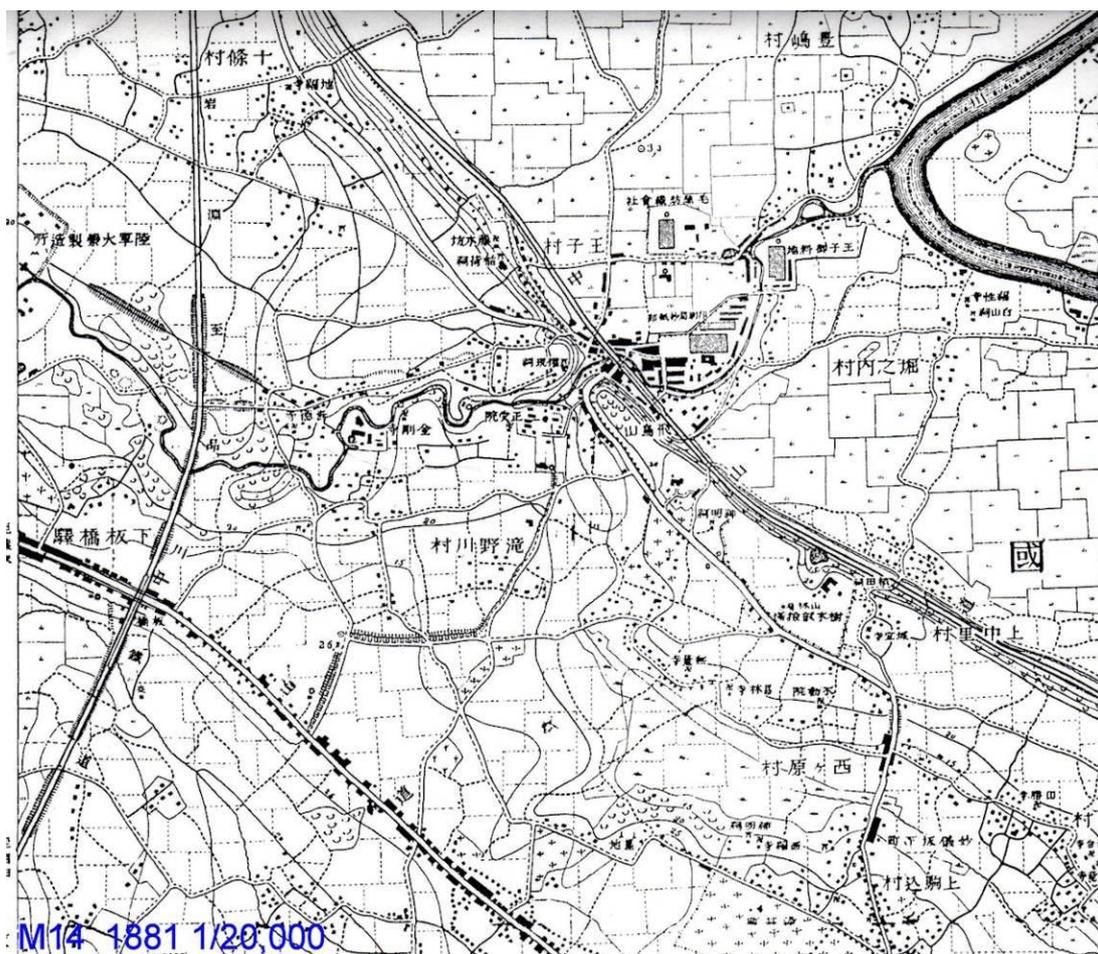
チエルナード染井商店街を終えて、大通り（田端高台通り）を横断すると蛇行跡は顕著になる。滝野川第三小学校の塀の曲り、日本醸造協会近くの驚くほど蛇行した道などが、素人にも川の跡であることを想像させるほど、終末の蛇行の形状は見事である。

⑬ 音無親水公園・王子神社・JR王子駅

先に述べたように、江戸時代以前の石神井川は、現谷田川をたどって上野の不忍池へ、さらに東京湾へとつながっていた。その後、河川争奪などによる流路変更があって、飛鳥山のやや北へ回り込む形になった。そのとき南進する谷田川と、北進する無名川のようにすは、古地図や旧版地図で明らかである。

その後、飛鳥山付近でのS字形流路が原因で洪水時に谷田川方向に氾濫するのを防ぐため、飛鳥山の下をトンネルで通す飛鳥山分水路が建設され、1969年3月に完成している。かつての音無渓谷を彷彿させる旧流路は音無親水公園となり、それを見下ろす位置に王子神社がある。

谷田川の源流をたどる街歩きは、JR王子駅で終わる。



谷田川と逆川（無名川）との分水界付近
(1/20,000 「下谷区」M13)

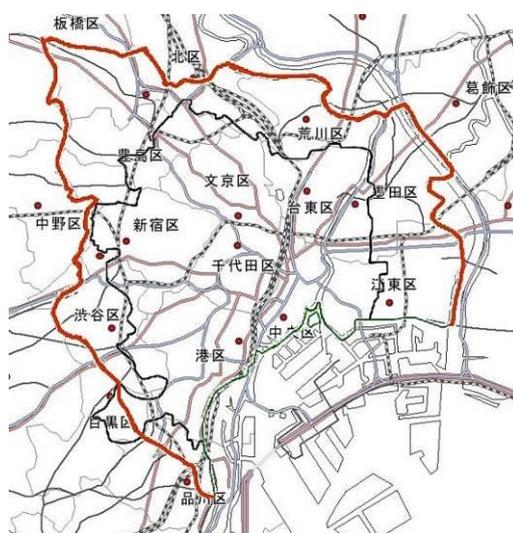
地図豆知識：朱引き・墨引き

天正18年(1590)徳川家康が江戸に入府して以来、発展・膨張をし続けた首都江戸は、100年後の享保期には町数が千を超え人口が百万人を超える巨大都市へと変貌したが、江

江戸の境界・範囲については曖昧なものだった。江戸時代は身分社会で町民・武士・僧侶により支配する機関もそれぞれ独立していたからだ。

江戸市中（御府内）の範囲を幕府が示したのは江戸幕府誕生から二百年を過ぎた文政元年（1818）目付 牧助右衛門から「御府内外堺筋之儀」についての伺いが出されてからのこと。これを受けて幕府評定所が評議して、作成したのが江戸朱引図で、これを江戸の範囲としての幕府の統一見解となった。これが、寺社奉行が勧化を許す範囲、高札場の掲示範囲、旗本・御家人が御府外に出るときの範囲などとなった。一方で、町奉行支配範囲は、それ以前に墨引き線として江戸の範囲とされていた。

これらの基本は、城を中心にして1日に徒歩で往復できる範囲が江戸であった。一部目黒付近で墨引きが朱引きを越えているのは、当時江戸庶民の行楽地としてにぎわいを見せた目黒不動を配慮したためだという。



朱引き、墨引きの範囲

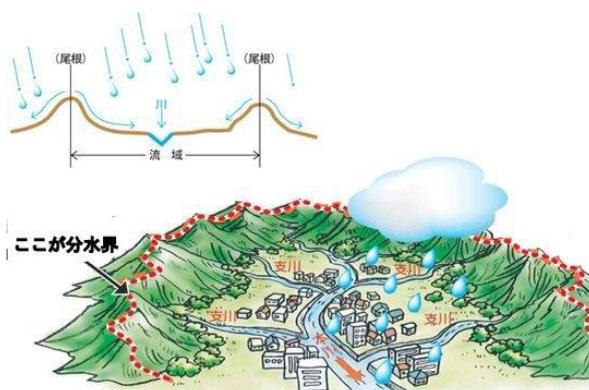
明治朱引き：1869年（明治2年）2月19日、東京府は、新たな朱引を定めた。この明治期の朱引は、皇居を中心として、朱引の内側を「市街地」、外側を「郷村地」と定めるものだった。同年3月16日には、朱引内に50区の区画が制定された（五十番組制、五十区制）。1871年（明治4年）6月、再改正によって範囲を縮小された朱引内は44区に再編成（朱引内四十四区制）され、1878年（明治11年）の郡区町村編制法の施行（東京15区の制定）まで続いた。

地図豆知識：分水界

分水界とは、流域（水系）の境界線のこと、分水嶺・流域界とも呼ばれる。すなわち、雨水が異なる河川に流れ込む境目のことだから、一般的には稜線（尾根）と分水界は一致する。ただし、等々力溪谷（谷沢川）で身近に見られるように、河川侵食の激しい河川が、

隣接する他の河川の分水界を奪う形で流路変更する河川争奪地形などでは、谷の中に分水界が存在する（谷中分水界：こくちゅうぶんすいかい）ことになって、顕著な尾根とはならない。

当地では、かつて本図の西北から南東へ流下していた石神井川が、飛鳥山の東を刻む小さな流れが武蔵野台地への浸食を早めて、石神井川との分水界を奪って同川の流れを真東方向へと変えたことで、あるいは石神井川が洪水によって東進したことで、流路変更が起き、デジタル標高地形図（右中央やや下）に見えるような逆川と谷田川の谷中分水界ができた。



分水界・流域というもの（鶴見川流域ネットワーキング HP から）

その他短縮コースとして

その 10-2 谷田川（藍染川）を歩く（距離約 4.0km）

【道順】

JR 上野駅→（藍染川）→不忍池→鷗外荘→谷田川の始まり→せんべい大黒屋→臨江寺→三浦坂のねんねこや→丁子屋→へび道→よみせ通り→谷中銀座→天王寺几号水準点→JR 日暮里駅

ルートマップ



**** オフィス 地図豆 yamaoka mitsuharu ****